多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響

千葉大学 黒 沢 香¹

The effects of self-consciousness and self-esteem on conformity to a majority

Kaoru Kurosawa (*Department of Behavioral Sciences, Faculty of Letters, Chiba University, Inage-ku, Chiba 263*)

Ninety-five Japanese students made judgments of line lengths under different levels of conformity pressure in the Asch/Crutchfield paradigm. Conformity pressure level (whether the preceding four or two 'others' unanimously picked a wrong choice) and public self-consciousness interacted; under high pressure, the higher the public self-consciousness, the more conforming responses. Independently, under high pressure, higher self-esteem led to fewer conforming responses. Under low pressure, neither public self-consciousness nor self-esteem had a significant effect. None of the following affected conformity: gender, private self-consciousness, or social self-esteem. In addition, anti-conformity (picking a wrong choice in the control trials where the 'others' chose the correct one) was observed, replicating the findings first reported by Frager (1970). A gender by social self-esteem by block (first vs. second half of experimental task) interaction, a gender by self-esteem by block interaction, and a gender by public self-consciousness interaction separately affected the number of anti-conformity responses. Implications for self-consciousness theories are discussed.

Key words: self-consciousness, self-consciousness scale, self-esteem, conformity, anti-conformity.

自覚状態と自己意識特性

私たちの注意は、自分自身に向けられるときと、自分以外に向けられるときがある。Duval & Wicklund (1972)は自分自身を注目の対象として意識することを objective self-awareness (客体的自覚; 渡辺, 1989 を参照)と呼び、この内的状態が人の行動に及ぼす影響を理論化し、研究を行った。

客体的自覚の研究ではもともと、この状態を引き起こす刺激や状況と、自覚状態が行動に及ぼす影響とに関心があつた。しかしすぐに自覚状態つまり自己に注意に向けた状態になりやすい性格特性が注目され、Fenigstein, Scheier, & Buss (1975)は、この個人差を測る性格尺度として、自己意識尺度 (Self-Consciousness Scale) を作成した。この際に、この性格特性にはほぼ独立した2次元があることが指摘された。すなわち自己の外見や行動、振る舞いなど、他者から容易に知ることのできる面について注意を向けやすい公的自己意識と、他者からうかがい知れない自己の内面——態度や感情、動機、考え方など——に注意を向けやすい私的自己意識である。

この2次元や性格特性自体に、真剣な疑問の提起もある (例えば、Wicklund & Gollwitzer, 1987) 半面、自己意識は有用な性格特性概念として近年特に注目を集め、数多くの研究に用いられてきた。Fenigstein らの尺度は信頼性が高く因子構造が安定していることが知られており、日本語版にも同様の因子が見出されている (渡辺, 1989)。本研究では多数派から暗黙の圧力がかかる同調の状況を用いて、この性格特性概念をさらに検討する。

同調、反同調と性格特性

同調は、自分の判断に自信がない場合やどちらの行動でもよい場合に他者の判断や行動を参考にするものと、自分の私的な判断や行動傾向とは裏腹に他者と同じ判断や行動をとるものに分類できる。Asch (1956) は多数派への同調の実験を行い、後者の同調行動を研究した。多数派への同調を規定する要因として、彼は全員一致や他者の数など、状況的要因を主に研究したが、同調しやすさに極端な個人差があることにも、研究の当初から注目している (Asch, 1956)。また、Crutchfield (1955) は同調しにくい人として、権威主義的でなく柔軟性のある、独立的で自尊心の高い、曖昧さを許容できる人物像を描いている。

しかしながら、同調しにくい人と同調しやすい人を対比して、その性格特徴をさらに明確にしようとした研究の多くは、同調と性格の関連について否定的なようであ

¹ 本研究の実験者をつとめた金井末紀子さんと柳沢陸子さんに感謝します。またこの原稿を読んでご指導を頂いた青木孝悦・江草浩幸両先生に厚くお礼を申し上げます。

る。例えば、Allen (1975) は同調者と非同調者の一貫した特徴は未だ知られていないと結論し、Moscovici (1985) も、状況を越え一貫して他者に影響されやすい人を見出そうとすることは無意味だと考える。一方、Aronson (1988) は同調しやすい人の特徴として低い自尊心をあげているが、この場合性格特性ではなく、状況操作によって一時的に低下させられたものである。

一方、最近になって同調行動と関連する性格特性として自己意識をあげる知見がいくつか報告されている。例えば、Froming & Carver (1981) は、私的自己意識の高い者が同調行動を起こしにくいこと、逆に公的自己意識の高い者には同調しやすい傾向が見られることを報告している。また Santee & Maslach (1982) は、私的自己意識と自尊心がそれぞれ同調と負の関係にあり、公的自己意識と対人不安が正の関係にあるという実験結果を報告している。ただし、彼らの用いた TSBI の自尊心尺度 (Helmreich & Stapp, 1974) は内容的には対人不安尺度とほぼ同一のものであり、それぞれが同調と正負の関係にあるのは当然と考えられる。実際、Santee & Maslach (1982) は自尊心と対人不安との高い相関 ($r = -.61$) を報告している。

日本における Asch (1956) のパラダイムを使った同調研究に Frager (1970) の実験がある。その主な知見は、この研究法を使った場合、日本の大学生の同調率はアメリカ人学生のそれよりも高くないという意外な事実と、それまで観察されたことのなかった反同調を見出したことである。反同調 (anti-conformity) とは、他者が正しい判断を示しているのに、わざわざ間違った判断を示すという点で、他者の行動や判断に影響されず独立した判断や行動を示す非同調 (non-conformity) とは違う。他者の行動や判断が自己の行動や判断の対極として扱われる点で、反同調も同調と同様に、他者の行動・判断に影響されていると考えられる。Frager (1970) は同調の規定要因として性格特性よりも価値観に注目しており、彼の伝統性尺度で得点の高い女性に同調が、疎外感尺度得点の高い男性に反同調が多かったと報告している。

本研究では、Crutchfield (1955) が使ったものと類似の装置を製作してコンピュータで制御し、5人1組の男女が参加した実験を行う。その際、視覚刺激を判断材料として、実験的に操作した多数派情報により暗黙の同調圧力をかける。また同じ被験者について自己意識尺度を含む性格特性の測定を行う。上記の先行研究の結果から、同調に関しては次のような予測が可能であろう。すなわち、公的自己意識の高い者は同調を起こしやすく、反対に私的自己意識の高い者は同調を起こしにくい。また自尊心の高い者ほど、同調を起こさない。

一方、反同調現象についての知見は数少なく、その予測は容易でない。反同調はある面では心理的反発 (reac-

tance; Brehm, 1966) と類似している。しかしながら、Frager (1970) も指摘しているように、まだ同調圧力のかかっていない時点からすでにこの反応が生じうるのであれば、心理的反発の定義に合わない。だから、自己意識と心理的反発についての知見 (例えば、Carver & Scheier, 1981a) は参考にはならない²。また、同調と反同調には相関が見られなかった (Frager, 1970) ことから、同調しない者が反同調を起こすという単なる対極の行動としての予測では不十分である。しかし、これまでの自己意識研究が示す性格像から、公的自己意識の高い者は反同調を起こしにくいと考えてよいと思われる。そこで今回はこれを仮の予測として実験を行った。

方 法

被験者 大学の教養課程での心理学を受講している学生 95 名³ (うち、男 49 名、女 46 名) が 5 人ずつ参加した。男女の数は特に統制しなかったが各組に必ず両性が含まれた。実験操作の都合上、毎回必ず参加者が 5 名必要であったが、ちょうど 5 名をいつも集めることは困難なので、そのうち最低でも 1 名は実験協力者で補充した。

装 置 コンピュータ (NEC9801UV) によって制御された自作のスイッチボックス 5 台を用いた。その上面には 5 行各 6 個の表示ランプ (黄色) と、スイッチ・表示機能を併せ持つ 1 行計 6 個のスイッチランプ (緑色)、そして信号ランプ (赤色) 1 個がそのすぐ左に配置されている。このうち最下行と右端のランプは本実験には使われず、実際に使用されたのは $4 \times 5 = 20$ 個の表示ランプと 5 個のスイッチランプ、そして信号ランプ 1 個であった。

手続き 実験参加者には“視覚刺激の呈示時間と記憶の関係”の研究と説明した。集合した参加者を実験室に案内し、お互いの様子が見えないよう衝立で仕切ったブースに着席させた。実験の説明には標準化のためテープレコーダーを使った。参加者の課題は正面に置かれた上記コンピュータの画面に呈示される基準線分の長さを記憶し、画面の暗転後約 2 秒して一斉に呈示される比較線分 5 本のうち、どれが同じ長さかを対応するスイッチで示すことである。比較刺激には順不同に並べられた、

² 日本においても自己意識と同調行動について、石川らの研究がある (石川・渡辺・押見, 1984) が、被験者に公的・私的自己意識のいずれかが高い者だけを用いており、その結果はうまく解釈できない。言い換えれば、本研究が検討する問題のためには適切な統制群が存在しない。また反同調は彼らのいう模倣反応と学習反応に関連しているが、いずれも有意な結果が報告されていない。

³ 参加者は 3 つのクラスから、友人・知人は一緒に参加できないと説明して募集した。実験協力者、およびフロピィ事故でデータが失われた参加者を含まない。

あらかじめ定められた長さの線分を用いた。ただし全員が同時に回答するとコンピュータの入力に支障をきたすと説明し、赤いランプが各参加者に対してランダムな順序で点灯するまで各自の回答を待つように指示した。

参加者への具体的な教示は“赤い信号ランプがついたら速かに、できるだけ正確に回答してください”であった。参加者の押したスイッチ番号と、信号ランプの点灯から参加者がスイッチを押すまでの反応時間を、コンピュータによって自動的に記録した。

各スイッチボックスの緑色のスイッチ行は、置かれたブースの順番に対応した位置に配置されていた。その上下には黄色の表示ランプが並ぶが、教示ではその意味について全く触れず、その表示ランプが他の参加者の回答を示すと、実験参加者が思い込みやすい状況を作った。しかし実際には、スイッチボックス 5 台のそれぞれ 20 個の表示ランプと赤い信号ランプ 1 つは、コンピュータによって同時にまったく同一のパターンで点滅された。

練習試行 5 回の後、40 組の刺激が呈示されたが、そのうち 20 組は表示ランプの多数が正しい回答を示す統制試行であった。統制試行には表示ランプの 1 つが他とは違った選択を示す“不一致試行”が 7 回あった。その他の 33 試行での表示ランプの選択は、正しい場合でも間違った場合でも全員一致であった。表示ランプが一致して間違った回答を選ぶのが圧力試行であるが、20 の圧力試行のうち 10 は参加者が第 3 番目に回答し、残り 2 人の回答を参加者の後で表示する“低圧力試行”であり、残り 10 は参加者が最終回答者として第 5 番目に回答する“高圧力試行”であった。練習試行と統制試行での回答順は、5 つの順序にランダムに割り振った。これらの操作はコンピュータ・プログラムによって行い、参加者全員が全く同じ条件で、全く同じ情報を受けた。

課題後の手続き 実験課題が終了した時点で、次のような質問に対して、1—7 の選択肢で答えてもらった。7 に近いほど質問の内容に同意したことになる。A. 実験者の説明はよく分かりましたか。B. 実験課題は楽しかったですか。C. 実験課題は難しかったですか。D. 画面の線分はよく見えましたか。E. 実験中緊張しましたか。F. 装置の黄色い表示ランプが気になりましたか。G. あな自身自身の判断を回答できませんでしたか。

この質問紙の後、自己意識尺度を含む性格質問紙に回答してもらった。そして最後に、これは他の参加者でなくコンピュータが表示した偽情報によって、回答がどう影響されるのかを調べる実験であったと説明し、本実験について他者と話さないよう依頼して実験を終了した。

結 果

性格変数 自己意識尺度⁴は公的、私的自己意識に加え、社会的自尊心と自尊心の 4 下位尺度を含む。これら

の尺度得点の諸統計量を Table 1 に示す。男女に有意差があったのは社会的自尊心のみで、男性の平均値が女性のそれを上回った (40.74 vs. 35.70; $F[1, 93]=5.291$, $p<.05$)。また下位尺度間の相関も、社会的自尊心と自尊心の間を除き、.3 以下であった。この自尊心尺度は社会的状況を意味する項目をまったく含まず、因子分析では社会的自尊心尺度と別の因子として抽出される。しかしどちらも自己評価に関連しており、この 2 つが相関を持つことは当然とも考えられる。4 下位尺度は信頼性係数 α もほぼ .75 以上であり、その得点を独立変数としてデータ分析に用いることに、特に問題はないと判断される。

同 調 圧力試行において、“他者”の示した回答を選ぶか、長さで“他者”の回答と正しい回答の中間にある選択肢を選んだ回数を、同調の指標とした。各同調レベルにおける性別の参加者数と平均同調数を Table 2 に示す。これを従属変数として、性別と性格変数の 2 要因を被験者間、圧力の高低を被験者内要因とした 3 元配置分散分析⁵を行った。性格変数はそれぞれの分析に、下位尺度得点をひとつずつそのまま連続変数として用いた。

まず、性別主効果の要因は有意でなく ($F[1, 91]=.34$, $p>.5$)、このような課題において同調する傾向には、男女差がないことが示された。圧力高低の同調数への主効果も同様に有意でなかった ($F[1, 91]=.42$, $p>.5$)。性格変数については、公的自己意識が圧力高低との有意な交互作用効果を示した ($F[1, 91]=4.288$, $p<.05$)。圧力が低いときには、この変数の係数はほぼ零 (B 係数⁶=.0002) であるが、圧力が高いときには正の係数 ($B=.0366$) となる。つまり、公的自己意識が高いほど、高圧力試行で高い同調を示し、圧力の低い試行では、この変数は同調数にまったく影響を持たなかったことになる。この交互作用効果を Figure 1 に示す。

また自尊心と圧力高低との交互作用効果も有意であっ

⁴ 尺度の項目については付録を参照のこと。この尺度の計量的特性は開発の経緯とともに論文にまとめられている (黒沢 香, 千葉大学人文研究第 21 号 [1992 年] Pp. 79-122)。社会的自尊心は自己意識尺度では通常、対人不安 (Social Anxiety) と逆転して呼ばれるが、内容はまったく同じものである。

⁵ 試行の前半 vs. 後半を被験者内要因として加えた 4 元配置の分散分析も行ったが、この要因には有意な効果がほとんどなく、本文に述べた結果を変更したり限定しなかった。従って特にこの要因については論じない。

⁶ 本研究で使われた分散分析から得られる独立変数 (性格変数) の係数は、標準化されていない重回帰係数 (B 係数) と同じものである。つまり、この係数は予測 (独立) 変数における 1 単位の変化が、基準 (従属) 変数の何単位の変化に対応するかという比を表している。

Table 1
Means and standard deviations, and correlations
among self-consciousness subscales^{a)}

Subscales ^{b)}	Mean	SD	Reliability alpha	Private Social Self		
				Self-C	Self-E	Esteem
Public Self-Consciousness	50.85	9.40	.886	.274	-.286	-.270
Private Self-Consciousness	46.77	8.04	.747		-.123	-.018
Social Self-Esteem	38.29	10.91	.860			.525
Self-Esteem	42.80	8.70	.787			

a) The number of Subjects is 95. Also see Footnote 4.

b) The number of Self-Esteem scale items is 11; for others 10. Each item has 7-point alternatives.

Table 2
Number of subjects at each level of conformity, and means and standard
deviations of conforming responses

	Number of conforming responses					Mean	SD
	0	1-2	3-6	7-18	total		
Men	10	18	9	12	49	3.76	4.10
Women	7	12	18	9	46	4.24	4.08
All subjects	17	30	27	21	95	3.99	4.07
	17.9%	31.6%	28.4%	22.1%

Figure 1. Predicted conformity scores as a function of public self-consciousness and trial type.

Note. Predicted scores are computed with coefficients estimated by the model. They are not observed cell means.

Figure 2. Predicted conformity scores as a function of self-esteem and trial type.

Table 3
Number of subjects at each level of anti-conformity, and means and standard deviations of anti-conformity responses

	Number of anti-conformity responses				Mean	SD
	0	1	2-8	total		
Men	22	18	9	49	1.11	1.71
Women	26	13	7	46	.87	1.56
All subjects	48	31	16	95	.99	1.63
	50.5%	32.6%	16.8%			

た ($F[1, 91]=4.857, p<.05$). 圧力が高い試行においては自尊心が高いほど同調数が少なかった ($B=-.0538$) が、圧力の低い条件では自尊心の影響は弱かった ($B=-.0139$; Figure 2 を参照). 社会的自尊心や私的自己意識を性格変数とした分散分析に有意な要因はなかった.

反同調 “他者” が一致して正しい回答を示す統制試行で参加者が違う回答を選んだ場合は反同調である. また不一致の統制試行でも、正しい多数派とは異なった回答を選ぶのは反同調的反応と見なせる. 回答順序で条件にあう統制試行 15 のこれらの反応回数を反同調の指標として分散分析を行った. Table 3 にこの反同調数の、各レベルにおける性別の参加者数と平均反同調数を示す. なお同調数と反同調数の相関は $r=.064$ であり, Frager (1970) の結果同様、ほぼ無相関であることが分かった.

性格変数 1 つと性別を被験者間、40 試行の前半後半を被験者内要因とした 3 元配置分散分析の結果、性別×公的自己意識、性別×社会的自尊心×前後、性別×自尊心×前後の 3 つの交互作用が、別々の分析でそれぞれ有意な効果を示した. 反同調は男性においては、公的自己意

識が高いほど少なく ($B=-.0811$), 女性においては公的自己意識とほぼ無関係 ($B=.0129$) である ($F[1, 91]=6.952, p<.01$; Figure 3).

また、前半、男性は社会的自尊心が高いほど反同調が多く ($B=.0381$), 女性には逆に社会的自尊心が低いほど反同調が多い ($B=-.0326$) が、これらの傾向は後半にほとんど消失するという 3 元の交互作用効果が見られた ($F[1, 91]=13.485, p<.001$; Figure 4). この効果は前半後半をつぶした性別×社会的自尊心の有意な交互作用効果 ($F[1, 91]=6.909, p<.01$) も含んでいる. 自尊心中心の 3 元の交互作用効果 ($F[1, 91]=8.470, p<.01$) は社会的自尊心のそれと似ており、後者の効果を統制すると有意でなくなる ($p>.2$). 逆に自尊心の交互作用効果を統制しても、社会的自尊心の効果は有意 ($F[1, 89]=4.500, p<.04$) であることから、自尊心の効果は社会的自尊心と共通する分散で説明できることがわかる.

誤反応数 正しい反応、同調、そして反同調と見なせる反応以外は単に誤反応と考えられる. 参加者の約 1/3 の 33 名がそのような誤反応を示し、平均誤反応数は全体の 1.2% 弱にあたる .474 であった. 上述と同様の分散分析を繰り返したが、性別、性格、圧力高低、いずれの要

Figure 3. Predicted anti-conformity responses as a function of public self-consciousness and gender.

Figure 4. Predicted anti-conformity responses as a function of social self-esteem, block (1st vs. 2nd half of the experimental task), and gender.

因の主効果, 交互作用効果とも有意なものはない。

反応時間 前半と後半における高圧力試行と低圧力試行での平均反応時間を計算し, 被験者内要因を前半後半と圧力高低で 2 元, 被験者間には性別と性格の 2 要因として, 4 元配置分散分析を行った。その結果, 被験者内の要因に有意なものなかったため, 被験者内要因を統制 vs. 圧力として単純平均をそれぞれ計算し, 被験者間の性別と性格変数の 2 要因とで 3 元配置の分散分析を行った。

その結果, 性別の主効果 ($F[1, 91]=7.945, p<.01$) が有意であり, 女性の方が反応時間が長かった (男性 720.7 ms vs. 女性 896.0 ms)。そして, 統制 vs. 圧力×私的自己意識の交互作用が有意水準に近い効果を示した ($F[1, 91]=3.139, p<.08$)。圧力試行では, 私的自己意識が高いほど反応時間が短い ($B=-6.912$)。統制試行では私的自己意識の効果はほとんどなかった ($B=-.648$)。なお, 他の性格変数に有意なものはない。

反応時間についてさらに検討するため, 中央値で分割した同調数の高低 (2.5 以上 vs. それ以下) と反同調の有無とで参加者を 4 分し, 被験者間を 2 要因, 被験者内は統制 vs. 圧力試行の 1 要因として, 3 元配置の分散分析を行った。その結果, 同調数の高低×統制 vs. 圧力の 2 元交互作用効果のみが有意であった ($F[1, 91]=6.591, p<.05$)。各参加者グループごとの平均反応時間を Figure 5 に示す。この図から同調数の多い者は, 統制試行に比べ圧力試行で反応時間が長く, 同調数の少ない者は統制

Figure 5. Mean reaction time for each trial type of the four subject groups. Number of subjects are in parentheses. The four are:

- ^a low Anti-Conformity=low Conformity,
- ^b low Anti-Conformity=high Conformity,
- ^c high Anti-Conformity=low Conformity, and
- ^d high Anti-Conformity=high Conformity groups.

試行と圧力試行に差のないことが分かる。また, 反同調を示した者と示さなかった者では, 反応時間のパターンに大きな違いがなかったことを示している。

課題後の質問紙 各質問に対する回答について, 性別と性格変数の要因による 2 元配置分散分析を行った。質問 A ($\bar{X}=6.21, SD=.92$) については, 性別×公的自己意識の交互作用が有意であった ($F[1, 91]=8.487, p<.01$)。男性は公的自己意識が高いほど, 実験者の説明がよく分かったと答えている ($B=.0423$) のに対して, 女性には弱い逆の傾向 ($B=-.0163$) を示している。

質問 B ($\bar{X}=4.67, SD=1.27$) では私的自己意識の主効果が有意であった ($F[1, 91]=4.786, p<.05$)。男女とも私的自己意識が高いほど, 実験課題が楽しかった ($B=.0328$) ことになる。質問 C ($\bar{X}=2.86, SD=1.54$) には自尊心の主効果が見られた ($F[1, 91]=4.142, p<.05$)。男女とも自尊心が高いほど実験課題が難しいものとは感じなかった ($B=-.0368$) わけである。

質問 D と E に有意な効果はなかったが, 質問 F ($\bar{X}=4.66, SD=1.96$) には公的自己意識の有意な主効果が認められた ($F[1, 91]=5.493, p<.05$)。公的自己意識の高い者ほど, 黄色い表示ランプが気になったと答えている ($B=.0485$)。この質問の回答には同時に自尊心の主効果も見られた ($F[1, 91]=4.259, p<.05$)。すなわち, 自尊心が高いほど表示ランプが気にならなかった ($B=-.0415$)。また性別×社会的自尊心の交互作用も有意で ($F[1, 91]=5.766, p<.05$)。男性には影響はほとんどなかった ($B=-.0028$) が, 社会的自尊心の高い女性ほど表示ランプが気になったと答えている ($B=.0870$)。

最後の G “あなた自身の判断を回答できましたか” ($\bar{X}=6.13, SD=1.11$) には性別と自尊心の主効果が有意であった。男性は女性に比較して, 自分自身の判断を回答できたと答えている (男性 6.34 vs. 女性 5.90; $F[1, 91]=4.311, p<.05$)。また自尊心の高い者ほど自分自身の判断を回答できたと答えている ($B=.0281$; $F[1, 91]=5.583, p<.05$)。その他の要因に有意なものはない。

考 察

同調と反同調 同調数は全実験参加者を平均して約 4 回であり, 圧力試行 20 回に対し約 20% の同調率となる。数字だけでは先行研究よりも率がやや低いように思われる。その理由として, 本実験ではより自然な状況設定を追求したため全員一致でない試行を入れたことが, まず考えられる。それに加えて, 参加者の匿名性が高かったこと, 衝立のため他の参加者が見えず, 自分も他から見られなかったこと, 実験者はコンピュータに向かい参加者の回答に注意を払っているようには見えなかったこと, コンピュータ制御で実験がやや機械的に, 淡淡と進められたことがあげられよう。

また少なめの数字ではあるが、同調しなかった者が全体の約 18% いた。まったく同調を起こさない者が 6 人に 1 人を超えていたということは、視覚的刺激セットが判断課題として容易で、ほとんどの参加者が正答を選べたことを示している。このことから、この実験における同調が主に、自己の判断や行動傾向に反し他者に合わせる種類のものではあったと判断できる。

反同調の結果は、20 年も前の Frager (1970) の結果を忠実に再現している。全参加者の平均は約 1 回、可能回数 15 に対して約 1/15 の反同調率で、Frager の約 1/16 とたいへん近い。反同調と同調に相関がないことも本実験で確認された。Frager (1970) は文化的・時代的背景から反同調を解釈しているが、時代が移り、研究を行った大学や実験手続きに違いがあるのにもかかわらず、このような結果になったことは、日本人大学生の変わらぬ傾向を示しているとも考えられ、たいへん興味深い。

また、本研究の実験課題・状況では、同調・反同調行動のいずれにも、性別の主効果が見られなかったことは強調してよいだろう。すでに指摘されているように (例えば、Moscovici, 1985)、一般の人が持つステレオタイプに反し、女性は男性よりも社会的影響を受けやすいわけではない。この点においても、本実験の結果と Frager (1970) の報告は一致している。ただし本実験において、女性の反応時間は男性のそれよりも長かった。さらに、同調行動に性差はなかったものの、女性は男性に比べ自分自身の判断を回答できたと答える傾向が弱かった。つまり社会的影響の受けやすさでなく、反応時間や (表明された) 自信のなさ、性差があるようである。

公的自己意識 過去の研究と同様、本実験においても、公的自己意識の高い者は低い者に比べ、他者の影響を受けやすいことが確認された。この特性が高いほど高圧力条件で同調数が多く、課題後の質問紙で黄色い表示ランプが気になったと答えている。公的自己意識が高いほど自己判断や行動の基準として、他者判断や行動を重視する傾向が強まるという仮説は、この特性が高い男子学生に反同調が少なかったこととも関連があるだろう。ただし女性の公的自己意識は反同調と関連がなかったから、実験前の予測は半分だけ正しかったことになる。

この性別×性格の交互作用は、課題後に男性は公的自己意識が高いほど実験の説明がよく分かったと答え、女性に弱い逆の傾向があることと関連していると思われる。もっとも、反同調を起こした公的自己意識の低い男性が、行動に合わせて説明がよく分からなかったと課題後に自己正当化 (Aronson, 1988) を起こした可能性も否定できない。いずれにせよ、なぜ反同調が起こるのか説明するには現在のデータでは不十分である。結果が示しているのは、公的自己意識が同時に同調と (男性の) 反同調を部分的に説明する可能性である。この概念は他者の

行動や判断を自己の行動・判断の基準として用いたり用いなかったりする傾向と密接な関連を持つと結論できよう。

私的自己意識 実験結果は私的自己意識と同調数との関係についての予測と一致しなかった。しかし同時に反応時間の分析により、私的自己意識の高い者は低い者より圧力試行において反応時間が短い傾向にあることが分かった。同調数が多い者のほうが圧力試行での反応時間が長かった (Figure 5) とはいえ、この結果は高い私的自己意識と同調しない傾向とを間接的にしか関連づけない。

反応時間の結果は、私的自己意識の高い者がじっくり時間をかけ、自己の反応などの内面を検討して判断・行動するのではないことを意味する。少なくともこのような課題では、自己の内的反応などを素早く察知し、迅速な決断を下していると言えよう。一方、Carver & Scheier (1981b) の制御理論 (control theory) では自覚状態を、negative feedback を中心にした TOTE loop の過程と捉えている。そのような自覚状態は非自覚状態よりも、例えば判断表示に長い反応時間がかかるはずである。実際に、自覚状態の人や自己意識の高い人は、解けないパズル課題をなかなかあきらめず、長い時間をかけてがんばると報告されている (Carver & Scheier, 1981b)。本実験の結果は、どちらかと言えば Hull & Levy (1979) の符号化自覚理論がうまく説明するだろう。彼らの理論での自己意識は、情報処理を自己関連レベルで行う傾向、すなわち状況の情報を符号化する過程での個人差を意味している。だから自己意識の高い人のほうが自己関連の情報処理が早いという予測も可能である。私的自己意識が高い人ほど実験課題を楽しんだのも、課題や状況を自己関連として知覚したのかも知れない。

現在の自覚研究は Carver & Scheier (1981b) の理論が中心であるが、例えば自己意識と自覚状態が直接的に関連しているという彼らの主張についても、必ずしも決着がついているわけではない (Wicklund & Gollwitzer, 1987 を参照)。また彼らの実験結果は日本ではあまりうまく再現されていないようである。これらと私的自己意識についての結果を考察すると、この分野で今後必要なのは、米国の理論と知見を批判的かつ積極的に追試し再現することであろう。その際できるだけ被験者の内的なプロセスを探るような実験計画が望ましい。そのような研究は米国においても数少ないからである。

自尊心 自尊心と公的自己意識はいくつかの従属変数に対して、逆パターンの効果を示している。つまり、同調しやすい人に比べ同調しない人は自尊心の高い人であり、公的自己意識の低い人でもある。また自尊心が高い者ほど、表示ランプが気にならなかったと答える傾向があるのも、公的自己意識の低い者とよく似た結果である。

しかし同時に自尊心は公的自己意識とは違った形の効果も示している。例えば自尊心が高い者は低い者に比べ、実験課題が難しくなかったと答える傾向が強い。それに自尊心の高い者ほど、自分自身の判断を回答できたと答える傾向がある。これらはすべて、この性格特性概念に適合し、その妥当性を支持する結果であり、同時に Crutchfield (1955) の描いた同調を起こしやすい人——起こしにくい人の人物像や、Aronson (1988) の自尊心と同調に関する考え方も支持している。

社会的自尊心 本研究では社会的自尊心が性別要因との交互作用効果をいくつか示したことが注目される。例えば反同調が多かったのは、この特性の高い男性と低い女性である。これに関連して、課題後の質問紙において社会的自尊心の高い女性ほど黄色い表示ランプが気になったと答えているが、男性は社会的自尊心の影響をほとんど示さなかった。社会的自尊心についてのこれらの結果は、日本の文化・社会における性役割観などの考察を加えた研究がさらに必要であることを示唆している。

反同調は日本以外ではあまり報告されていない (Frager, 1970) ようなので、同調と反同調の現象について、慎重に次のような可能性を指摘したい。公的自己意識は同調と反同調に共通した規定要因であり、自尊心は主に同調に、社会的自尊心は反同調だけに関連した要因ではないだろうか。従来の自尊心尺度は社会的自尊心尺度と共通の項目を含んでいたため、このような明確な区別が難しかったと思われる。この2つの自尊心が類似の効果を示すと同時に、いくつかの従属変数に違った形の効果を持ったことを考えると、自己評価を社会的状況におけるものと社会的状況に無関係なものとし、2種類の自尊心を想定することに十分な意味があると思われる。

圧力要因との交互作用効果 公的自己意識と自尊心は同調数に対して主効果を持たず、それぞれが圧力要因との交互作用でのみ有意な効果を示した。交互作用効果であっても、自尊心に関しては実験前の予測どおりと言える。それは同調圧力をかけるのが4人分の情報である高圧力試行でも2人分である低圧力試行でも、自尊心が高いほど同調数が少なかったからである。2条件を比べると、高圧力試行において自尊心の係数の絶対値が大きい。つまり自尊心は同調圧力に対し、高圧力下でより大きな抵抗力を持つのであり、これは理論どおりと考えられる。

一方、公的自己意識については高圧力試行では予想どおりだったが、低圧力試行では効果がまったくなかった。“圧力の高低”は被験者内要因だから、公的自己意識の高い同一の参加者が高圧力試行では同調し、低圧力試行では同調圧力に抵抗したことになる。この被験者内交互作用効果を説明するためには、なんらかの内的プロセスを仮定するのが自然であろう。いずれにせよ、これらは

人と状況との交互作用であるから、性格心理学における交互作用論 (Interactionism) の考え方と一致している。

先行研究では性格特性変数それぞれの主効果という形で結果が報告されてきた。これは状況を越え、どのような場合にもその特性の効果が存在することを意味する。一方、交互作用論の立場からは状況を越え一貫して他者に影響されやすい人というのは考えられない (例えば、Moscovici, 1985)。性格の単純主効果を想定している先行研究の考え方には問題があることを指摘しておきたい。

引用文献

- Allen, V. L. 1975 Social support for nonconformity. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 8. New York: Academic Press. Pp. 1-43.
- Aronson, E. 1988 *The social animal*. 5th ed. New York: Freeman.
- Asch, S. E. 1956 Studies of independence and conformity: I. A minority of one against a unanimous majority. *Psychological Monographs*, No. 416. (Vol. 70, No. 9)
- Brehm, J. W. 1966 *A theory of psychological reactance*. New York: Academic Press.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981a Self-consciousness and reactance. *Journal of Research in Personality*, 15, 16-29.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981b *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- Crutchfield, R. A. 1955 Conformity and character. *American Psychologist*, 10, 191-198.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Frager, R. 1970 Conformity and anticonformity in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 203-210.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Froming, W. J., & Carver, C. S. 1981 Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, 15, 159-171.
- Helmreich, R., & Stapp, J. 1974 Short forms of the Texas Social Behavior Inventory (TSBI), an objective measure of self-esteem. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 4, 473-475.
- Hull, J. G., & Levy, A. S. 1979 The organizational functions of the self: An alternative to the Duval and Wicklund model of self-awareness. *Journal of*

Personality and Social Psychology, **37**, 756-768.

石川直弘・渡辺浪二・押見輝男 1984 同調行動に及ぼす自己意識特性の効果 日本心理学会第48回大会発表論文集, 707.

Moscovici, S. 1985 Social influence and conformity. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *The handbook of social psychology*. 3rd ed. New York: Random House. Pp. 347-412.

Santee, R. T., & Maslach, C. 1982 To agree or not to agree: Personal dissent amid social pressure to

conform. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 690-700.

渡辺浪二 1989 自己意識と行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ 第1巻 誠信書房 Pp. 109-128.

Wicklund, R. A., & Gollwitzer, P. M. 1987 The fallacy of the private-public self-focus distinction. *Journal of Personality*, **55**, 491-523.

——1992. 1. 13. 受稿, 1992. 9. 5. 受理——

付 録

自己意識尺度と自尊心尺度 (黒沢 香 1992)

私的自己意識項目

12. いつも、自分がどんな人間であるかを理解しようとしている。
16. 自分の能力について考えることが多い。
17. 離れたところから、自分を見つめている自分を感ずることがある。
20. 自分が今どう感じているか、あまり注意を払わない。 *
24. 自分自身について、深く考えることはしない。 *
26. 自分の気分が変わると、それを敏感に感じる。
27. あまり自分というものを意識しないたちである。 *
33. 何か問題を解く時の、自分の心の動きをそのまま感ずる。
39. あまり自分のことを反省したり、振り返ったりすることはしない。 *
42. 自分の行為や考えに矛盾がないかどうか、いつも考える。

公的自己意識項目

2. 人前で自分のふるまい方が、気にかかるほうである。
3. 人に自分をどう見せるか、ということに気をを使う。
5. 人の目に映る自分の姿について、いつも意識してしまう。
6. 他人からどう見られるかを考えながら行動する。
8. 自分についての噂に関心がある。
13. 人の目を、気にせずに行動する。 *
28. 他の人が自分のことをどう思っているのか、まったく気にしない。 *
30. 人により印象を与えているかどうか、よく心配するほうだ。
34. あまり自分の外見を気にしない。 *
37. 他人の評価をほとんど気にしないほうだ。 *

自尊心項目

4. 何をしても、これは絶対にうまく行く、と感ずることが少ない。 *
11. たいていの人が持つ程度の能力は、自分にもある。
15. 知っているほとんどの人より、自分のほうが優れている。
22. 自分の人生を考えると、きっと成功すると思う。
23. 自分は色々な点で、もっと変わる必要がある。 *
29. 基本的には、自分は価値のある人間だ。
35. 自分のことを嫌いだと思えることがよくある。 *
36. 自分が今までやってきたことは、結局みんな失敗だったと言える。 *
38. 自分自身をあまり高く評価していない。 *
40. 自分について、かなり自信があるほうだ。
41. 自分について、他人に自慢できることはほとんどない。 *

社会的自尊心項目

7. 知らない人と一緒にいる時には、自分に自信を持ってないことが多い。 *
9. 人が大勢いると、神経質になってしまう。 *
10. 知らない所では、うちとけるまでに時間がかかる。 *
14. 自分が内気すぎると悩んでいる。 *
18. 注目されるので、大勢の人が集まっている部屋に、一人で入っていくのは苦手だ。 *
19. 人前では、ちょっとしたことで、恥ずかしくなるほうである。 *
21. 大勢の前で話す時でも、心配になったり、恐いと感ずたりすることはない。
25. 社交的な状況で、実にうまく振舞ったと感ずることがよくある。
31. 初対面の人に、平気で話しかけることができる。
32. 大勢の人たちと話すのに、ふさわしい内容を見つめるのに苦労することが多い。 *

* は反転項目、左の数字は項目番号